

『長距離走者の孤独』における仮定法

白 谷 敦 彦*

0. 序

本論文はアラン・シリトーの『長距離走者の孤独』における仮定法表現を取り扱う。主に仮定法と直説法が混合して現れる箇所を取り上げ、なぜそのようなことが生じるのかについて考察する。『長距離走者の孤独』の概要は次のようなものである。主人公 Smith はパン屋に忍び込んでお金を盗み、お金を自宅に隠しておいたが、目撃証言により怪しいと警官から目をつけられることになる。数度尋問を受け最終的には隠しておいたお金が発見されたために少年院送致となる。少年院ではクロスカントリー競技の選手にされる。そしてレースに出場し、優勝できる力を持っていたが、わざと負ける。以上が概要であるが、この物語は、その主人公の少年院での出来事の回顧が第 1 章になっており、パン屋に忍び込んでから捕まるまでの回顧が第 2 章で（時間の流れからいうと、第 2 章で語られるできごとが第 1 章のそれに先行する）、クロスカントリーのレースについての回顧とその後日談が第 3 章になっている。それでは以下の節で『長距離走者の孤独』における仮定法表現をみてゆく。便宜上、章ごとに分け、第 1 節で第 1 章を、第 2 節で第 2 章を、第 3 節で第 3 章を取り扱うことにする。

* 福岡大学人文学部教授

1. 第1章における仮定法

本節は第1章における仮定法表現を取り扱う。第1章は主人公が少年院での出来事を回顧して語るというものである。

まず、主人公が早朝に少年院の門を出てランニング（マラソンの練習）をする場面を見よう（引用のページと行は使用したテキストでのものである。¹ また、引用には適宜下線を施しわかりやすくする。）

I feel like the last man in the world because I think that all those three hundred sleepers behind me are dead.

(p. 25, ll. 18-21)

主人公がランニングするため少年院の門の外に出た場面である。three hundred sleepers は、少年院の屋内でまだ寝ている人間を指している。常識的に考えると屋内で寝ている人間が死亡しているということはあるにないが、仮定法ではなく直説法で表現されている。寝ていることと死んでいることはあまり変わらないということで、それほど非現実とは考えていないということが表現されているのではなかろうか。少なくとも主人公は非現実的なこと、単なる妄想ではないという認識なのであろう。ランニング中に目にうつる物について次のように表現する箇所がある。

Everything's dead, but good, because it's dead before coming alive, not dead after being alive.

(p. 29, ll. 8-10)

Be dead ということを実味をもってとらえているのである。多分に観念的で医学的に言う「死」とは異なるであろう。上の引用にすぐ後続するランニン

グの場面をみよう。

I can't feel my hands or feet or flesh at all, like I'm a ghost who wouldn't know the earth was under him if he didn't see it now and again through the mist.

(p. 29, ll. 11-15)

早朝であるため、ランニングを始めた時点では手足がかじかんでいるという描写である。Like I'm a ghost というところまでは直説法だが、a ghost についての説明（関係代名詞以下）から仮定法になっている。なぜ as if I were/was a ghost でなく、like I'm a ghost なのだろうか。それは次のような主人公の思考の流れを表現するためだと思われる。「手の感覚がない。足もだ。いや体全体を感じるができない。まるで幽霊だ」というように思考が流れてゆく。そしてさらに幽霊について説明しなくなった。足の下に地面が見えないような幽霊である。見ても見えない。もやのようなものがかかって見えないことがわかり、もやの下にあるのかと思い目を凝らして見ようとするが見えない。幽霊の描写に移った時点で、このように、幽霊が実際にどのようなものかはわからないので、幽霊の描写は現実世界から乖離するため仮定法で表現されたのであろう。従って、文章の途中で直説法から仮定法への切り替わりが生じたのである。主人公の思考のあり方が効果的に表現されている。

次はランニングしながらあれこれ考える場面の一つで、院長の演説での "be honest" という言葉を思い出す場面である。

if they'd ever known what it means to be honest, which they don't, and never will so help me God Almighty.

(p. 35, ll. 19-22)

院長たちは "be honest" という意味をわかっているのか、いやわかっていない、と考える場面である。If 節の最初は仮定法で、後続の文章は直説法になっている。まず、わかっているならと仮定してみたが、すぐにわかっていると確信を持つに至り、don't で表現したのである。仮定法を続けて wouldn't と表現したのでは確信の度合いが弱まって表現されてしまう。

2. 第 2 章における仮定法

本節は第 2 章における仮定法を扱う。第 2 章は、主人公がパン屋に忍び込んでから捕まるまでを回顧するというものである。

まず、テレビ番組を見ていて、その番組の内容について語る場面である。

Even when he'd knocked off a couple of bank clerks I hoped he wouldn't get nabbed. In fact then I wished more than ever he wouldn't

(p. 46, ll. 17-19)

劇中の犯人が殺人を犯しても捕まらなければいいなと思ったという内容である。Hope の後にも wish の後にも仮定法が用いられているので、実際はあり得ないと思っていることが表現されているが、まずは hope で表現しておいて、次に wish で表現しているところに心理状態を読み取ることができる。こうなったらいいな (hope で表現されること)。でもならないことはわかっている (hope の次の仮定法によって表現されること)。しかし、そうならないことはわかっているんだけど、やはり、そうなることを願う (wish で表現されること)、というような思考の流れである。

次はパン屋に盗みに入り、犯行場所を後にしようとする時、「ここで警官に

職務質問をされたらどうしようか」という思いがよぎる。頭の中で想定問答が展開される。その部分は "What is it?" he'd ask, and I'd say: "A growth." のように仮定法で表現され、仮定法表現が続く。しかし、最後の方では次のように直説法に切り替わる。

He would if we liked, he says, and he'd pay for it as well. But we tell him not to bother, that he's a good bloke even if he is a copper, that we know a short cut anyway. Then just as we're turning a corner he gets it into his big batchy head that we're going the opposite way to the hospital, and call us back.

(p. 56, l. 21 - p. 57, l. 1)

最初は問答を想像しているという意識があったのであるが、途中から意識があたかも現実にも目の前で起きていくように感じてきたので、それを反映して直説法に切り替わっているものと思われる。

目撃証言から怪しいと睨んだ警官が自宅を訪れ、主人公は数度尋問を受けることになる。警官の問い詰めに「金曜日の夜、僕はテレビを見ていたが、時々音を消して楽しむから音は聞いていなかった」という自分の返答を聞いた母親が台所で笑うという場面である。

I could hear mam laughing from the kitchen, and I hoped Mike's mam was doing the same if the cops had gone to him as well.

(p. 63, ll. 4-6)

共犯者のマイクの所にも警官が行っているのならマイクの母親も同じように振舞って欲しいということを語っている。最初の部分では hope が使われている

ことと時制から直説法であることがわかるが、if 節以降は仮定法になっている。これはマイクの所にも警官が行っているのかわからないからである。Hopeの内容は本当に望んでいることであり、ifの内容は確信の持てないことであることが表現されている。この直説法と仮定法の混合も主人公の思考のあり方を反映している。

次は、別の日のことで、雨の日に自宅に来た警官を家の中に入れようとしな
いという場面である。

I suppose he could have pushed by me and come in if he'd wanted, but maybe he'd got used to asking questions on the doorstep and didn't want to be put off by changing his ground even though it was raining.

(p. 69, ll. 11-16)

「警官は戸口で尋問するのに慣れているのだろう」という推測までは仮定法で書かれているが、「警官は自分の立つ位置を変えることで形勢を危うくしたくなかったのだろう」という推測は直説法で書かれている。仮定法の部分は推測の域を出ないが、直説法の部分についてはある程度確証というか、推測に自信があったのであろう。

ここで完全な仮定法もみておこう。主人公の仮定法が常に不完全であるわけではないことを示すためである。

Rain was splashing down so hard I thought he'd get washed away if he didn't come inside.

(p. 70, ll. 22-24)

雨の日に警官が訪ねてきているのであるが、主人公にとっては警官は憎らしい

存在であるので、「警官が家の中に入ろうとしないのであれば雨が洪水となって、警官を流し去ればいいのに」と心の中で思う場面である。起こりえないという認識があるので完全な仮定法を使っている。

次に、盗んだお金がついに発見される場面をみよう。自宅に尋問に訪れた警官と主人公の目の前で、庭に隠しておいたお金が雨によって隠していた場所から流され出るというものである。

three greenbacks as well had been washed down by the water, and more were following, lying flat at first after their fall, then getting tilted at the corners by wind and rainspots as if they were alive and wanted to get back into the dry snug drainpipe out of the terrible weather, and you can't imagine how I wished they'd be able to.

(p. 72, ll. 15-22)

まずは過去のことであるので過去時制で語られる。そして、お金がどんどん流れ出す場面からは、下線部の直前の you can't imagine という表現からわかるように、あたかも読者と一緒にその場面をみているかのように現在時制（非過去）で語られている。従って、as if の節は仮定法になっていると考えてよからう。文法の公式通りの仮定法である。下線部の仮定法を見よう。Able to の後は省略されているが、お金よ何とか耐えて隠れていくれという気持ちが出ている。「耐えて隠れて」という動詞が省略されていると考えられるが、このことばは先行文脈にも後続文脈にもみあたらない。お金が戻っていくことは不可能であることがわかっているので完全な仮定法が使われている。後続する文脈に「仕方がないのはわかっているがしゃべり続けるしかなかった (I thought I'd better keep on talking, though I knew it wasn't much good now)」とあるので、半分諦めの気持ちがあることがわかる。

3. 第3章における仮定法

本章では第3章における仮定法を扱う。第3章では、クロスカントリーのレースについての回顧、そしてその後日談が語られる。まずは、レース中に走りながらあれこれと思いをめぐらせる場面である。次の引用部分では、少年院に収容された初日に院長から be honest と言われたことを回想している。

For when the governor talked to me of being honest when I first came in he didn't know what the word meant or he wouldn't have had me here in this race

(p. 79, ll. 12-15)

主人公が少年院に収容された初日に院長は主人公に be honest というのであるが、そのことを回想し、be honest ということばの意味を院長はわかっていないと考えている。わかっているならば、自分をレースに出さなかったであろうというのである。院長がわかっていないと考えるところではその判断に確信があるので he didn't know と、直説法が使われている。そして、その後で、そう考える根拠を示すのであるが、「そうでなければ自分をレースに出さなかったであろう」という推測であるので仮定法が用いられている。自信のあることを述べ、そしてその根拠を口にするときに推測を述べるという、主人公の気持ちが直説法と仮定法で効果的に語られている。この場面にすぐに後続する場面も見よう。

He'd have had me where I'd have had him if I'd been in his place

(p. 79, ll. 16-18)

He は院長を指している。もし自分が院長の立場であったならば、自分を（犯罪者を）置いたであろうところに、院長は自分を置いたであろう、と考える場面である。院長が be honest ということばの意味をわかっているのならという仮定が続いている。文法的に公式通りの仮定法が用いられている。先の引用部分の直後であり、先の引用部分の最後は仮定法になっていたの、思考内容ともにその続きとなるためである。

次に、レースの途中であるが、他の走者に大きく差をつけ、勝利を確信する場面である。

On I went ... knowing I had won the race though it wasn't half over, won it if I wanted it, could go on for ten or fifteen or twenty miles if I had to and drop dead at the finish of it, which would be the same, in the end, as living a honest life like the governor wanted me to.

(p. 82, ll. 8-19)

最初（I had won）は直説法で書かれている。Though it wasn't half over も直説法である。レースに勝ったという確信を表現している。さらに次の won も直説法である。その次の if 節からが仮定法となっている。実はわざとレースに負けて少年院の院長に復讐してやろうという魂胆であるので、万が一その予定をやめにしてこのまま走って優勝することもできるんだという考えが頭に浮かんだのである。自分の中では勝利を確信したのであるから、それは直説法で語られ、その後に来る仮定（もし望めば本当に優勝できるという）は想定の中にあることなので仮定法で語られている。この後の場面で、走り続けながら「もしこのまま優勝したら」と考える場面では、次のように仮定法が用いられている。

if I kept on being honest in the way he wanted and won my race for him
he'd see I got the cushiest six months still left to run

(p. 84, ll. 16-19)

結局わざとレースに負けたことが描かれ、後日談が語られる。そして主人公がこれまで語ってきたこと（執筆してきた原稿）を友人に渡しておくということが語られる。

I'd like to see the governor's face when he reads it, if he does, which I don't
suppose he will; even if he did read it though I don't think he'd know what
it was all about.

(p. 98, ll. 21-24)

「院長が俺の本を読んだときの顔が見たいよ。でも読まないだろうな。読んだとしてもわからないだろうな」という内容である。読んだときの院長の顔が見たいと言ったのであるから、最初は院長が自分の本を読むことはあり得ることだと考えていた。従って if he does, I don't suppose he will の部分は直説法で書かれている。読まないだろうと言った直後に、読むはずがないというように、読まないことを確信した。それで、再び読むということを仮定した表現をする時には（even if he did read it 以下）、読まないという確信が仮定法表現を選ばせたのである。同じ「もし読んだら」という仮定を2度するのに、1回目は「あり得ることだ」と考え、そして途中で「いや、あり得ないことだ」と考え方が変わり、その心理状態が表現に反映されている、興味深い描写である。

4. 結論

本論文はアラン・シリトーの『長距離走者の孤独』における仮定法について考察をおこなった。一見文法上変に感じられる表現も主人公の意識や思考を反映するために効果的に用いられているといえることができる。

注

1. テキストに用いた版は、昭和 37 年（1962 年）に金星堂から出版された *THE LONELINESS OF THE LONG-DISTANCE RUNNER* である。

参考文献

- 大江三郎. 1982. 『動詞（Ⅰ）』 東京：研究社出版.
大江三郎. 1983. 『動詞（Ⅱ）』 東京：研究社出版.
大江三郎. 1984. 『英文構造の分析—コミュニケーションの立場から—』
東京：弓書房.